

8月24日（月）ヘブル人への手紙2章9節

「ただ、御使いよりもわずかの間低くされた方、すなわちイエスのことは見ています。」

（9節）

ヘブル書の著者は、御使いよりもわずかの間、低くされたイエス様を見上げようとしています。なぜなら、そこにこそ希望があり、全人類の問題を解決する答えがあるからです。私たちも、信仰の歩みの中にあって「イエスのことを見ています」といつもイエス様を見上げることでできる者でありたいと願わされます。

9節の「御使いよりもわずかの間低くされた方」「栄光と誉れの冠を受けられました。」は、7節と8節の詩篇の引用をイエス様に適用しようとしています。すなわちキリストが人としてこの地上に来られ、人として歩まれている間は、「御使いよりも低くされた方」として歩まれ、それだけではなく、十字架の上で死の苦しみを味わわれました。それはまさに、全人類の罪からの救いが成し遂げられるためでした。「その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。」とされています。つまりイエス様の死による私たちの罪からの救いは、まさに神の恵みであり、すべての人が罪からの救いにあずかるようにと味わわれたものだということがわかります。またキリストは低くされたままではなく、「栄光と誉れの冠を受けられました。」ピリピ人への手紙2章9節に「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。」と、十字架の死にまでも従われた後、神によって高くされたことが明らかにされていますので、イエスが受けた栄光と誉れは、苦難の直接的な結果であることがわかります。そしてイエスの御跡に従う私たち一人ひとりにも苦難を通して栄光を受けることが約束されています。この地上にあって主に従おうとするなら、報いは十分に与えられないかもしれません。しかし神が天において栄光と誉れの冠をかぶらせ、豊かに報いてくださいます。そのことを信じて創造主が被造物になるほど低くなられたイエス様にならって謙遜に主なる神に従い続けたいと思わされます。

8月25日（火）ヘブル人への手紙2章10節

「多くの子たちを栄光に導くために、彼らの救いの創始者を多くの苦しみを通して完全な者とされたのは、万物の存在の目的であり、また原因でもある神に、ふさわしいことであつたのです。」（10節）

9節で「イエスは死の苦しみのゆえに」「その死は」と、死が二回繰り返されていますが、10節で、なぜイエスが、そのような死の苦しみを味わわなければならなかったのかを説明しています。それは、「多くの子たちを栄光に導くために」とありますように、アダムが失った創造

の栄光を回復するためでした。「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、」（ローマ人への手紙3章23節）とありますように、アダムが神の栄光を失ってから、すべての人が創造の栄光を失ってしまいました。その私たちを罪から救ってくださることにより、私たちが神の栄光を受けることのできる者としてくださったのです。

ここでイエス・キリストは、「救いの創始者」と呼ばれています。創始者と訳されている言葉は、道の先駆けとか導き手を意味しています。つまり、イエスがいなければ、もしくはイエスによって救いが果たされなければ、人類にはどこにも救いはなかったということです。さらに「彼らの救いの創始者を多くの苦しみを通して完全な者とされた」とありますが、9節にありますように、キリストは十字架上で死の苦しみを味わわれました。救いの創始者であるキリストが苦しみを通して完全な者とされた姿は、私たちにも栄光に入るには苦難が必要であることを私たちにも教えていると言えます。そして「完全な者とされた」とは、御子に何か不完全な部分があったとか、完全にされるべきものがあったということではありません。むしろ、イエス様が救いの創始者となられるために、自分には全く必要のない十字架の苦難をあえて受けてくださったということです。ですから、私たちは、多くの苦しみを通して救いの創始者となってくださったイエス様に心からの感謝をささげるべきです。

「万物の存在の目的であり、また原因でもある神」とは、父なる神のことです。父なる神は、多くの子たちを栄光に導くために、彼らの救いの創始者を多くの苦しみを通して完全な者とされることをふさわしいと思われ、それをみこころとされたということです。しかし、ユダヤ人にとっては苦難を通されるメシアという概念は忌み嫌うべきものであり、とても受け入れることのできないものでした。十字架につけられたキリストは、「ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かなことです」（コリント人への手紙第一1章23節）しかし、父なる神は、苦難のメシア、苦難の後の栄光をみこころとされました。私たちもイエス様が苦難の後に栄光を受けられたように、苦難の後にある栄光を信じ、待ち望んで歩んでまいりたいと思われますし、信仰の創始者であるイエスを通して私たちにも失われた栄光が回復され、神の栄光にあずかる者とされていることに心から感謝しましょう。

8月26日（水）ヘブル人への手紙2章11節

「聖とする方も、聖とされる者たちも、みな一人の方から出ています。」（11節）

聖とするということが、このヘブル書においては非常に重要なテーマの一つですが、そのことばがここで初めて出てまいります。

聖とするということは、レビ記の中のささげ物や主の御用にあずかる人々に対して使われたもので、その場合には聖なる目的のために取っておかれるという意味があります。つまり聖別さ

れるということです。「聖とされる者」とは、救いの創始者であるキリストを通して救いにあずかった私たち一人ひとりのことです。そして聖とする方とはイエス様です。そして「みな一人の方から出ています。」とは、すべては父なる神様から出ているということですが、聖とするためにイエス様が信仰の創始者として遣わされたことも、またイエス・キリストの苦難を通しての救いにあずかったことも、すべては父なる神のみこころによる計画であり、父なる神様なしにはなしえなかったことであり、意味を持ちません。ですから、「すべてのものが、神から発し、神によって成り、神に至るのです。」（ローマ人への手紙 1 1 章 3 6 節）とされています。

さらに「イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥とせず」とあります。イエス様は私たちと同じ人となられ、まさに私たちが兄弟と呼ぶにふさわしい方となってくださいました。それ以上に、イエス様は私たちの罪からの贖いをなしてくださり、私たちが神の子としてくださり、私たちをともに御国を受け継ぐ兄弟としてくださったのです。そしてイエス様と一つとされている者たちは、栄光を共有する者とされています。イエス様は、そのような私たちの救いのためのわざを決して恥とは思わず、喜んでしてくださったのです。罪人の私たちにそうされる資格があったのではなく、イエス様から恥と思われても仕方がなかったのですが、あわれみと私たちへの愛のゆえにイエス様は、罪から来るすべての恥を十字架の上で、その身に受けてくださり、私たちが栄光を受けることができるようにしてくださったのです。その私たちに求められていることは、私たちがイエス様を決して恥と思わないということです。「だれでも、このような姦淫と罪の時代にあつて、わたしとわたしのことばを恥じるなら、人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき、その人を恥じます。」（マルコの福音書 8 章 3 8 節）またイエス様に兄弟と呼ばれている私たちは、主にある兄弟姉妹として互いに愛を示し合いたいと思わされます。

8月27日（木）ヘブル人への手紙2章12節

「わたしは、あなたの御名を兄弟たちに語り告げ、会衆の中であなたを賛美しよう。」（12節）

12、13節において三つの引用がなされますが、すべてキリストとその民の密接な関係を表すものです。

12節は、詩篇22篇22節の引用です。詩篇22篇はメシアの受難の詩とも言われていて、1節にイエス様の十字架上の叫びでもある「わが神 わが神 どうして私をお見捨てになったのですか。」とのことばが出てまいります。この詩篇22篇は、前半は苦しみの表現が続けられますが、21節後半から31節までは信仰による感謝と賛美へと変えられていきます。特にダビデは、19節から21節までで主の救いを祈り求めています。21節で「あなたは 私に答えてくださいました。」（21節）との信仰により、「私は あなたの御名を兄弟たちに語り告げ

会衆の中であなたを賛美します。」(22節)と主をほめたたえたのです。

再びヘブル人への手紙2章12節に戻りますが、「わたし」と言われているのはイエス様のことですが、11節で「イエスは彼らを兄弟と呼ぶことを恥とせずに」とあるように、「あなたの御名を兄弟たちに語り告げ、会衆の中であなたを賛美しよう」と言われていますが、ここで強調されていることは、聖とするイエス様と聖とされた私たちの一体性です。詩篇22篇が苦しみの後の感謝と賛美であるように、兄弟とされた私たちとイエス様は苦難の後の感謝と賛美をともに分かち合うことになります。

会衆は、教会とも訳することができますが、そこは、私たちが神によって呼び集められた場所です。そこに聖とするイエス様が豊かにご臨在される中で、イエス様のみわざにより聖とされ、また互いに兄弟姉妹とされた私たちの側でも、苦しみの中にあってもなお励まし合いながら、信仰によって喜びと感謝をもって救い主である神の御名を兄弟たちに語り告げ、会衆の中で心から神を賛美するのです。

8月28日(金) ヘブル人への手紙2章13節前半

「わたしはこの方に信頼を置く。」

「わたしはこの方に信頼を置く」とは、イザヤ書8章17節の引用です。実際にイザヤ書8章17節を見ますと、そこには「私は主を待ち望む。ヤコブの家から御顔を隠しておられる方を。私はこの方に望みを置く。」とあります。このイザヤ書8章は、1～4節がアラムとイスラエルの滅亡、5～8節はユダの破壊、9、10節は神によるユダの守りが記されています。そして11節で、主は、御自身の権威を示しつつ、預言者イザヤが神から受けた真理に立ち、滅び行く民の道に歩まないようにと戒めています。それだけ彼の受けた罪の誘惑も大きかったのかもしれない。そのような滅びゆく民の中で、「私は主を待ち望む。ヤコブの家から御顔を隠しておられる方を。私はこの方に望みを置く。」と彼の信仰を告白しているのです。

イエス様もまた「わたしはこの方に信頼を置く。」と言っておられます。これはイエス様が人となられた間の地上生涯のことを言っておられるのでしょうか。イエス様も、人としてさまざまな試みに遭われましたが、一番の試練は十字架でした。多くの子たちを栄光に導くために、彼らの救いの創始者となられたイエス様は、どんな中でも父なる神様に徹底的に信頼し、救いを成し遂げられたのです。ここに私たちは、主イエス様が示してくださった模範を見ることができます。私たちは絶望的だと思われる中にあってもなお主に信頼しているのでしょうか。私たちは苦しみの中にあってもなお主なる神様に信頼しているのでしょうか。私たちは将来の栄光を待ち望んで、今の苦しみを耐え忍ぶほどに父なる神に信頼しているのでしょうか。父なる神様に信頼して、十字架の死にまで従い通された主イエス様のように私たちもどこまでも神様に信頼す

る者とさせていただきます。

8月29日（土）ヘブル人への手紙2章13節後半

「見よ。わたしと、神がわたしに下さった子たち」

上記のみことばはイザヤ書8章18節の引用です。イザヤ書8章18節には、「見よ。私と、主が私に下さった子たちは、シオンの山に住む万軍の主からのイスラエルでのしるしとなり、また不思議となっている。」とあります。ここで言われている「しるし」というのは、あることが果たされる保証を表しています。「不思議」は特別な神の力の現れ、未来の出来事のしるしと考えることができます。それでは、未来のどのようなことが「しるし」「保証」として言われているかということについては、神のさばきによって国が滅ぼされたとしても、そこには残される者があり、そこから国が回復されていく、またそこから神の救いが現れることだと考えられます。

一方、ヘブル人への手紙2章13節で言われている「わたし」というのはイエス様のことで、「神がわたしに下さった子たち」は、神様の恵みによって救いにあずかった人々を指していると考えられます。イザヤが預言した通りに、イエス様がこの地上に誕生され、さらに救いの創始者であるイエス様が十字架の死の苦難を通して全人類に対する救いを成し遂げてくださいました。それにより、救いの恵みのわざを信じる者たちが起こされてまいりましたが、まさにその一人ひとは、父なる神がイエス・キリストに与えられた子たちと言えます。そしてイエス様ご自身が、最後まで救われた一人ひとりを神が自分に下さった子として守り、導き、支えてくださるのです。

私たちも、イエス様による救いにあずかることができ、父なる神がイエス様に与えられた一人に数えられている恵みに心から感謝しましょう。それとともに、苦難の中でもイエス様が、守り支えてくださることを信じ、将来の栄光を待ち望みながら最後まで信仰をもって歩んでまいりたいと思わされます。

8月30日（日）ヘブル人への手紙2章14、15節

「それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼし、死の恐怖によって一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」（14、15節）

「そういうわけで、子たちがみな血と肉とを持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。」と、ヘブル人への手紙の著者はイエスの受肉を語っています。受肉とは、すなわちイエスが私たちと同じ肉体をとって、この地上に来られたことを意味

しているわけですが、あえてここでは、血と肉とを持つとの表現を用いています。そしてなぜこのような表現を用いたのかということについては、イエス様が十字架の上で血を流し、肉を裂かれ、贖いの死を遂げられたことを知らせようとしたからです。血と肉を持つ私たちも必ず死を迎える時がまいります、イエスは多くの子たちを栄光に導くために、信仰の創始者として十字架の上で苦難の死を遂げられたのです。確かにイエス様は私たちと全く同じように、血と肉を持つ人となられ、死をもって地上の生涯を終えられましたが、その死は私たちとは全く異なるものでした。

そして十字架の上での罪からの贖いの死によって「死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によって滅ぼさ」れました。悪魔が私たちを死の力をもって支配することができるのは、私たちが罪にとどまっている時だけです。なぜならイエス様は、十字架で私たちの罪の完全な贖いを成し遂げてくださり、その死から三日目によみがえられることにより、死の力からの完全な解放をも与えてくださったからです。死は確かにすべての人を支配し、人がどうすることもできない力を持っていました。それは、まさに聖書が語るように奴隷状態でした。しかしイエス様が私たちに救いの賜物としての永遠のいのちを与えてくださることにより死の恐怖からも解放されました。イエス・キリストの全人類の初穂としての死からのよみがえりを信じる私たちにとっては、死はもはや恐れるものではなくなったのです。

イエス様は、十字架でなされた救いのみわざにより、確かに死の力を持つ悪魔を滅ぼし、死の恐怖から信じる者たちを解放してくださることで、信じるすべての者たちに悪魔と死に対して完全な勝利を与えてくださったのです。そのことを今日も主に心からの感謝をささげましょう。